舟越作品が表紙を飾った書籍一覧

堀田善衛『若き日の詩人たちの肖像（上・下）』 集英社文庫 1977 年
筒井康隆『残像に口紅を』 中央公論社 1989 年
須賀敦子『コルシア書店の仲間たち』 文藝春秋 1992 年
南木佳士『医学生』 文藝春秋 1993 年
Walter Bloch, *Heinrich IV. Moser und seine* Mütter: Roman, Ammann Verlag, 1993
梅内美華子『横断歩道（ゼブラ・ゾーン）』雁書館 1994 年
片岡徳雄『個性と教育 脱偏差値教育への展望』 小学館 1994 年
遠藤周作『新装版 恋することと愛すること』 実業之日本社 1994 年
辻仁成『愛はプライドより強く』 幻冬舎 1995 年
須賀敦子『コルシア書店の仲間たち』 文春文庫 1995 年
筒井康隆『残像に口紅を』 中公文庫 1995 年
高橋龍太郎『あなたの心が壊れるとき』 扶桑社 1997 年
澤口俊之『「私」は脳のどこにいるのか』 筑摩書房 1997 年
樋口修吉『最後の恋文 ミオ・パトローノ』 マガジンハウス 1997 年
社団法人日本歯科技工士会編集『歯科技工学臨床研修講座 3』 医歯薬出版 1997 年
辻仁成『愛の工面』 幻冬舎文庫 1997 年
辻仁成『愛はプライドより強く』 幻冬舎文庫 1998 年
須賀敦子『遠い朝の本たち』 筑摩書房 1998 年
須賀敦子『ヴェネツィアの宿』 文春文庫 1998 年
小森陽一『＜ゆらぎ＞の日本文学』 NHK ブックス 1998 年
高橋龍太郎『わたしの心は壊れてますか？』 扶桑社 1998 年
天童荒太『永遠の仔（上・下）』 幻冬舎 1999 年
南木佳士『医学生』 文春文庫 1998 年
ブレイク・モリソン著、中野恵津子訳『あなたが最後に父親と会ったのは？』 新潮社 1999 年
天童荒太『あふれた愛』 集英社 2000 年
辻仁成『海峡の光』 新潮文庫 2000 年
伊藤昌洋『映画少年』 作品社 2001 年
猪熊葉子『児童文学最終講義 しあわせな大詰めを求めて』 すえもりブックス 2001 年
須賀敦子『遠い朝の本たち』 ちくま文庫 2001 年
萩原葉子、萩原朔美『小綬鶏の家 親でもなく子でもなく』 集英社 2001 年
Harry Mulisch, *The Procedure*, Penguin Books, 2002
高橋龍太郎『あなたの心が壊れるとき』 扶桑社文庫 2002 年
スティーヴン・ラリー・バイラー著、京兼玲子訳『海は僕を見つめた』 アーティストハウスパブリッシャーズ 2003 年
天童荒太『孤独の歌声』 新潮文庫 2003 年
大江健三郎『二百年の子供』 中央公論新社 2003 年
天童荒太『永遠の仔（一〜五）』 幻冬舎文庫 2004 年
天童荒太『あふれた愛』 集英社文庫 2005 年
高橋龍太郎『わたしの心は壊れてますか？』 扶桑社文庫 2005 年
大江健三郎『二百年の子供』 中公文庫 2006 年
大江健三郎『「伝える言葉」プラス』 朝日新聞社 2006 年
五木寛之『人間の関係』 ポプラ社 2007 年
大宅歩『ある永遠の序奏 –青春の反逆と死-』 角川文庫 2008 年
マルコム・ゴールドスミス著、高橋誠一監訳、寺田真理子訳『私の声が聞こえますか 認知症がある人とのコミュニケーションの可能性を探る』 雲母書房 2008 年
天童荒太『悼む人』 文藝春秋 2008 年
外山滋比古『自分の頭で考える』 中央公論新社 2009 年
天童荒太『静人日記』 文藝春秋 2009 年
山折哲雄『わたしが死について語るなら』 ポプラ社 2010 年
加島祥造『わたしが人生について語るなら』 ポプラ社 2011 年

天童荒太『静人日記　悼む人 II』　文春文庫　2012 年
外山滋比古『自分の頭で考える』　中公文庫　2013 年
山折哲雄・柳美里著、生野照子・山岡昌之・鈴木眞理編著『人はなぜ「いじめ」るのか　その病理とケアを考える』　シービーアール　2013 年